

## 紹介

### 育種学会における根研究セミナー

植物育種に関する研究は特定の作物を除いて地上部の形質を対象にして行われており、地下部の形質、いわゆる根は改良の対象形質として殆ど取り上げられなかった。しかし根は、土中の養分を吸収するだけでなく、塩や水などのストレスあるいは土中微生物と直接関わりを持つ重要な器官であり、根の機能を改良することによって生産性の飛躍的向上が図られるものと期待される。このような考えに賛同する育種学会員有志の勉強会が学会講演会に併せて活動している。

根機能開発研究会が育種学会講演会当日の夕刻から催されるグループ研究集会のひとつとして開かれ、すでに2回の研究会が持たれた。第1回は1991年4月に行われ、「イネの胚発生における器官分化」（東北大農 長戸康郎）及び「多収性イネ品種の窒素吸収特性」（香川大農 一井眞比古）の2話題が提供された。第2回は1992年4月に行われ、「オオムギ根由来カルスの再分化能と染色体変異の関係」（東大農 吉田薰）及び「高等植物における硝酸還元酵素」（千葉大園 中川弘毅）の2話題が提供された。研究会は学会の一般講演終了後に始まり、いずれも20数名の参加者が空腹と疲労にも拘らず根機能に関する育種的知見の必要性や将来への期待など活発な議論を2時間余にわたって行った。研究会の今後の活動が根研究の高まりや新たな根機能の開発に繋がることを期待している。

根は多様な機能を有しており、形態、生理、遺伝、発生分化、生化学などの多元的なアプローチによって根機能の解明と開発が可能になる。従って根を作物学的観点からだけでなく、いろんな専門分野から総合的に根を取り上げようとする根研究会（JSRR）の意義は極めて大きいと思われる。

（香川大学農学部 一井眞比古）